

国際海事経済学会 (IAME) 2026 への参加

2026年6月30日～7月3日

■国際海事経済学会 (IAME) 2026 の概要

国際海事経済学会 (IAME: International Association of Maritime Economists) 2026が2026年6月30日から7月3日に、シンガポールの南洋理工大学で開催され、当研究所の田川研究員と、共同研究者の東京大学川崎智也准教授が参加し発表を行った。

IAMEは、海運・海事に関する経済学の発展を目的として、1992年にオランダの研究者を中心に設立された。現在では二つの学術誌と連携し、海運・港湾分野を代表する国際学会へと発展している。今回は、「海運経済の未来を形づくる」をテーマとしたシンガポール海事港湾庁副長官による基調講演をはじめ、36の研究セッションが行われた。120以上の大学、研究機関、政府機関、業界団体から約300名が参加した。

■発表内容

◇セッション「グリーン海運、脱炭素化および持続可能な港湾の環境評価と規制」

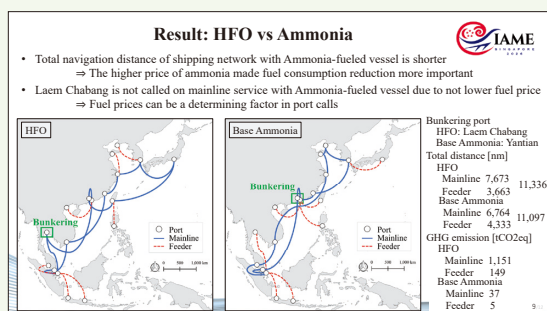
●発表

「燃料供給体制を考慮した代替燃料船の海運ネットワーク」(原文は英語)

田川 帆師 運輸総合研究所 研究員

7月2日のセッションにおいて、燃料価格及び Well-to-Wake 排出量(船舶燃料の製造から消費までの燃料ライフサイクル全体の温室効果ガス排出量)が地域ごとに大きく異なる代替燃料を対象として、地域差を考慮したコンテナ船の航路計画に及ぼす影響を分析したシミュレーション結果を基に、燃料を低価格で供給できる港湾は、燃料補給地及び主航路の寄港地として選定されることを発表した。

質疑では、シミュレーションモデル設定に関する質問があり、分析対象としてアンモニアを代替燃料とした理由及び船舶の運航費用の設定方法について回答した。



田川研究員の発表資料

◇セッション「港湾計画、ターミナル運用、インフラ設計、港湾アクセス」

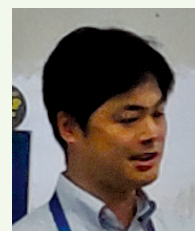
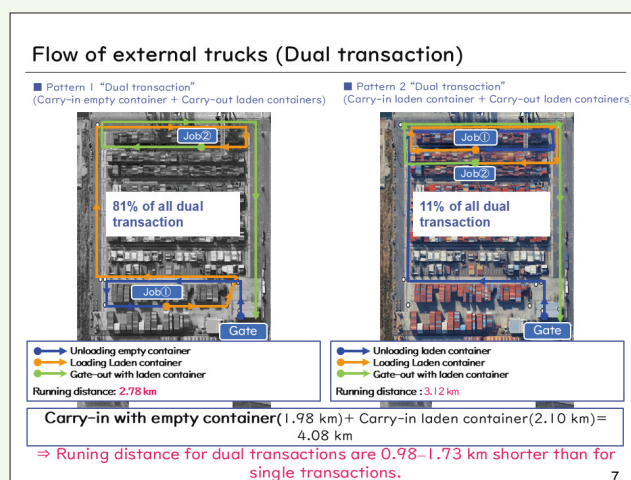
●発表

「コンテナターミナル運用における降ろし取り施策の評価」(原文は英語)

川崎 智也 東京大学大学院 准教授

7月2日のセッションにおいて、外部の共同研究者である東京大学の川崎准教授が、当研究所の「海と陸の機能の連携による陸海の結節の効率化・利便性の向上に関する研究調査」(2024年度～2026年度)の成果を踏まえて発表を行った(当研究所の研究メンバー:大森特任研究員、土屋特任研究員、辻本研究員、佐野研究員及び坂本研究員が共同執筆者となっている)。プレゼンテーションでは、降ろし取り(コンテナの搬入と搬出を一度に行う)の導入効果を検証するマイクロシミュレーションモデルの再現結果を基に、降ろし取りの導入率が高まるとゲートでの待ち時間、トラックの総滞留時間、CO₂排出量が削減されることを示した。

質疑では、今後の研究の発展性について質問があり、本研究で分析対象としたターミナル以外でのシミュレーションを行うことで共通点や相違点の比較による一般性の検証を行うなどと回答した。



東京大学 川崎准教授の発表資料

川崎准教授が発表した「海と陸の機能の連携による陸海の結節の効率化・利便性の向上に関する研究調査」の成果・提言は本誌P.18～の記事、及び運輸総合研究所のWEBページでご覧いただけます。
https://www.itri.or.jp/research/port/container_terminal.html

